

疎外のモチーフと童話的語り

—稲垣足穂の初期作品に見る「内容形式」一致の問題について

且部辰徳（京都大学）

文学の自意識は、自らに対する反省的意識と共起する以上、必然的にアポリアを招来する。昭和初期、文壇の主勢力となりつつあった「プロレタリア派」と「新感覚派」との間に繰り広げられた「形式主義論争」は、この時期の日本文学における、文学が自らに差し向けた問いのフレーム—「内容」が先か、「形式」が先か—を構成していた。「プロレタリア派」は、民衆が生活を向上させるための具体的指針をその「内容」として持つ「革命」達成の手段こそが文学である、と堅固に主張した。対する「新感覚派」は、「客観物」としての「文字」がリズムカルに「羅列」される「形式」が文学の「内容」を決定する、と反駁した。

当論争は、昭和4年に谷川徹三が『文学形式問答』の中で、文学における「内容」と「形式」は相関概念で分離不能であると理論的に総括したことで終止符を打たれるが、同年、稲垣足穂もまた「私における形式と内容」という小論で同様の主張を展開している。足穂は、新感覚派に周縁的ながらも与する立場にあったが、「内容」と「形式」を弁別し、いずれかの優位を説く当論争の問題枠組み自体を批判した。足穂が提出した、「内容」と「形式」は不分であるという帰結は、谷川の後塵を拝すものであり独自性の如何を問うほどのものでない、とされてきた。

しかし、「形式主義論争」の着火点に先立つ大正13年に発表された足穂の「わたしの耽美主義」には、谷川の議論に先行する主張が展開されていたことは注目に値しよう。そこでは、「耽美主義」的な「新芸術」としての文学は、近代都市の諸構成物を「素材」にとり、「文学の最高形態」しての「童話」においてそれらを「直接的」に扱うことで、「虚無性」という効果を獲得せねばならない、と断じられる。「童話」という語りの形式と、「素材」の一致を理想化するこうした言辞には、「内容」「形式」不分を主調とする後年の形式主義論争批判と近い論法が先取りされているとわかる。だが、ここで真に注目すべきは、足穂の言う「素材」は「内容」という語のパラフレーズではなく、両語の間には大きな意味の懸隔が認められるということである。容易にイデオロギーに回収されかねない「内容」を忌避し、事物の名へと端的に還元される「素材」へと立ち返る方途の提示こそ、足穂の眼目に他ならなかった。つまり、「素材」への回帰の途上で初めて、語られるものと語り方の融合が果たされるというのだ。また、その「素材」は、都市における断片化された事物ないし経験を基にした、いわば疎外のモチーフとして規定されていた点も注目に値しよう。

本発表では、こうした足穂の掲げた定式の有効性を検討したうえで、かような足穂の所産を「形式主義論争」を第三極から捉える参照点として位置づけることを試みたい。